燕雲十六州

―解説―

外山軍治

○

第十一世紀後半の東亜大陸の形勢は、一言にしていへば、宋と、遼と、西夏との鼎立である。支那本部の地は、漢族國家の宋の天下であるが、北方の、今日の滿洲から外蒙古にかけた地域は、契丹族の遼が占め、西方の、綏遠、陝西、甘肅、寧夏にわたる地方には、党項族の西夏が據つてゐた。

いま、支那本部の地は宋の天下であるといつたが、嚴密にいふとさうではなくて、今日の河北省の北部、北京附近の地方と、察南、晋北兩自治政府の管轄内に入つてゐる、外長城と内長城とにかこまれた地方、すなはち、長城の南側に沿うた北支那北端の一地帶は、宋の領土に入つてゐないで、長城の北に本據を有する遼の領有に歸してゐた。これが、宋人のいはゆる「燕雲の地」である。

もと、この地帶は、五代の晋をおこした石敬瑭が、獨立に際して契丹の援助をうけたことを德とし、その代償の意味で、契丹に割讓したものである。時に晋の天福元年、契丹の會同元年(九三七)で、宋の建國より二十四年前にあたり、爾來、百八十餘年の間、この地帶は契丹族の統治をうけたのであつた。

晋が契丹に割讓した土地は十六の州から成りたつてゐた。左にその十六州をあげ、括弧内にその州治を現在の地でしめさう。

今の河北省内にあるもの七州

幽州(北京)、薊州(薊縣)、涿州(涿縣)、檀州(密雲縣)、順州(順義縣)、瀛州(河間縣)、莫州(任邱縣)

今の察南自治政府管内にあるもの五州

新州(涿鹿縣)、嬀州(懷來縣)、儒州(延慶縣)、武

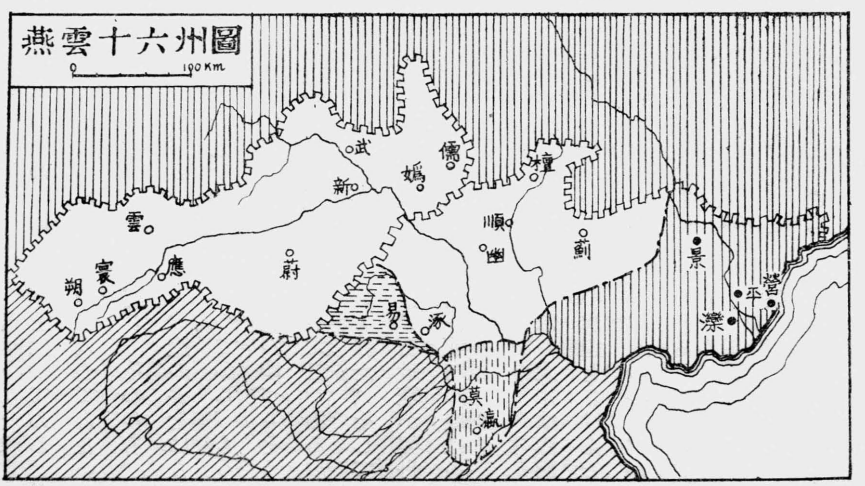
州(宣化縣)、蔚州(蔚縣)

今の晋北自治政府管内にあるもの四州

雲州(大同縣)、寰州(朔縣の東北、馬邑鄉附近)、應州(應縣)、朔州(朔縣)

河北側の七州を山前七州、察南、晋北側の九州を山後九州と呼ぶことが多い。それは、河北と察南、晋北、山西方面との境をなして、南北に走つてゐる太行山脈を中心とし、山の東を山前、山の西を山後とよんだものにほかならない。

このときには、まだ燕雲とはあまり呼ばないで、幽薊、幽燕、燕代などゝいはれてゐる。燕雲といふ稱呼は、それから百八十年ののち、この地帶を遼より奪回しようとした宋の徽宗時代からさかんに使はれだしたものである。



右にのべた十六州の地の東側、同じく長城の南側で渤海灣に沿つた平州(治所は今日の盧龍縣)、營州(治所は今の昌黎縣)、灤州(治所は今の灤縣)などの地は、それよりもまへ、すでに遼の領土となつてゐたのであるが、宋人のいはゆる燕雲の概念には、この地方も含まれてゐることを、ことわつておかねばならぬ。

○

長城を華夷のさかひと考へてゐる中原の漢人は、長城内の中華の地を、北狄の手に委ねたといふことで石敬瑭をうらんだ。石敬瑭自身、沙陀部の出身であるから、これも夷狄であるはずであるけれども、漢人は、これを夷狄視しないで、晋國をむしろ漢人國家として

とりあつかひ、中原國家である晉が、燕雲の地を契丹といふ夷狄にあたへたのはけしからん、そのために爾來中國は夷狄の侵寇にくるしめられるやうになつたといつて非難してゐる。

燕雲の地方を手に入れた遼では、その後幽州を南京（燕京ともいつた）に、雲州を西京に昇し、南京を中心とする河北の諸州を南京道、晉北、察南の諸州を西京道と稱し、東は南京、西は西京を前進根據地とし、南方を睥睨して、中原國家に對して優位を保つことができた。そればかりではない。瀛、莫方面から鹽を入手するといふ經濟的利便もあり、また、この方面の出身で、遼の朝廷に仕へて、漢人統治の衝にあたつてゐる多くの漢人士大夫の故郷を治下に入れたことが、彼等をして一層腰をすゑて契丹の民政に參畫させたといふ效果は、決して、すくなくなかつたであらう。

反對に、中原國家の方では、そのために蒙る壓迫感は堪へ難いので、反撥の機會があれば燕雲奪回を試みた。五代最後の周の世宗は、顯德六年（九五九）北伐を敢行して河北側の瀛州、莫州をうばひ、そのとき遼に歸してゐた易州（治所は今の易縣）をも手に入れた。それで、燕雲の十六州は、そのうち瀛、莫の二州を失つて十四州となつてゐる。易州は、晉が遼に割いた十六州のうちに入つてゐないが、遼の太宗のとき、一度遼の有に歸し、そののち、晉のあとに漢が中原に覇をとなへると、遼の手をはなれて漢の領内に入り、漢ほろび周おこつてから、もう一度遼にとられたものである。

周のゆづりをうけたといふ形式で位についたのが、宋の太祖であるが、宋も燕雲の回復を北方政策としてかゝげた。そして燕雲の地を失地といつてゐる。その昔、石敬瑭が契丹に與へたものを、宋が失地といふのは長城内の地は中華の地であるといふ思想から發する。

宋の太宗は雍熙三年、遼の統和四年（九八六）、燕雲の奪還をさけんで北伐したけれども、結局失敗にをはり、そののち、かへつて易州を三たび遼に奪はれたのである。宋は燕雲回復の事業に成功しなかつたばかりか、眞宗のときには、南伐した遼軍と澶州において和睦し、宋から銀や帛を提供すること、國境を現狀のまゝとし、互に國境附近において軍事施設をしないことなどをとりきめ、次の仁宗の時代に西夏が宋の西北邊

を侵したのに乘じて、遼が銀帛の增額を要求すると、これにも應じるといふ風で、遼の感情を刺戟しないやうに努めてゐるのである。かくて、宋、遼、西夏三國鼎立の形勢は、このころにきまり、いまの晉北、察南および河北北部の地は遼の領土に屬して、西は西夏の勢力に近く、南は宋の版圖に接した。

燕雲地方の民は漢人である。彼等は、契丹といふ遊牧民の國家にあつて、どういふ統治をうけたであらうか。宋人はよく、燕雲は中國の地、その民は中國の民豈塗炭よりすくはざるべけんやなどゝ、いかにも夷狄の治下に苦しめられてゐるやうにいひなすのが常であるが、はたして宋人のいふ通りであらうか。

燕雲の民が、一般漢人と同樣に、安樂な生活をいとなむことをもつて幸福とするならば、それは幸福であつたといはなければならない。强力な遼朝の治下にあつては、彼等の生命財產はよく保證せられ、中原國家の統治下にあるよりも、未開の契丹國家においては、とりあげられる租稅もかるかつたからである。彼等の生活の安易さは、契丹領に接した河北の住民が、たえず契丹の侵寇にくるしめられたのとは比較にならない。

また、燕雲においては、南京(燕京)、西京をはじめその要地には契丹大官がのりだしてきたけれども、その他の地方官には燕雲の士大夫を採用し、また遼の朝廷では、漢人の統治や文化的部門は漢人にまかせるといふ方針であつたから、鄕里において仕官しても中央政府に仕へても、容易に活躍の地位があたへられ、榮達の機會もあつた。中原國家に仕へて、邊疆の士人として蔑視せられるのよりは、よほどよかつたと思はれる。燕雲の民は、宋人のいふ如く、決して塗炭の苦みをなめてゐたものではなかつたやうである。

かうして、燕雲の地は、遼、宋、西夏の三國の間に介在しながら、比較的平穩な狀態がつゞいた。その東、西の二つの中心地である燕京と西京(大同)とは、漢文化の中心地と、遼の國都とを結ぶ交通線上にあるといふ關係上、都市としてめざましい發展をとげた。今日大同にのこつてゐる當代の佛寺は、その一面を如實にものがたるものである。

○

三國の鼎立の形勢にいちじるしい變化をあたへる大

事件がおこつた。それは一一一五年、北滿の一角におこつた女眞族の獨立運動にほかならぬ。

金國をたてた女眞の軍隊が、宿敵である遼軍をうつて滿洲の地を席捲してゐるのをきいた宋の徽宗は、新興女眞の勢力を利用して、燕雲の地帶を遼から奪回し祖宗以來、實現できなかつた大業成就の名譽を一身になはうと考へた。そこで海路より使を遣して夾攻の約を結び、宋は遼の南京(燕京)を、金は西京(大同)を攻め、成功の曉には、いままで宋が遼にあたへてゐた銀と帛を、そのまゝ金にあたへることを條件として、燕雲の地をもらひうけるといふことをとりきめた。兵力不振で實現できなかつた宿題を、術策によつてやつてのけようとしたものである。

夾攻の約は實行にうつされたが、宋では、また約束の燕京を攻めおとさないうちに、宣和四年、自分勝手に燕京を燕山府とあらため、河北地區を燕山府路としまた、宋の勢力は入りこんでもゐないのに、遼の西京を雲中府とよび、晉北、察南地區を雲中府路と名をかへてしまつた。隨分馬鹿げたことであるが、宋人の考では、この地方は、元來中國の地であるから、遼の名稱をそのまゝ使用してはいけないといふのであらう。從來は、幽薊とか幽燕とかいはれてゐたこの地帶を、燕山府路、雲中府路を略して燕雲とよび出したのはこの前後からである。

そして、宋が机上で命名した燕山府路、雲中府路は石晉が契丹にあたへた十六州より、瀛、莫二州をのぞいたかはりに、それよりまへに、契丹の領域に入つてゐた平州、營州、灤州と、そののちに契丹領となつた易州などをふくんだもので、事實、その範圍はちがつてゐるのであるけれども、概念の混同をきたして、石敬瑭が契丹にあたへた十六州をも、燕雲十六州と呼ぶやうになつたといふ說が、いまのところ有力である。

金軍が、遼の中京—熱河省寧城縣大名城—をおとしいれると、燕京にゐた遼の天祚帝は西京(大同)へ逃げた。そこで金軍は、夾攻の約にしたがひ、熱河方面から察南を經て晉北に進出して西京(大同)を攻めおとした。しかし、そのときには天祚帝はさらに陰山の方面へ逃げのび、西夏の援軍を得て勢力をもりかへさうとしたので、金軍は西夏の軍を厚和の西方でやぶり、その後も大同を根據地として遼帝の軍とたゝかひ、西夏

の東進にそなへることになつた。

しかし宋軍は燕京を攻めて敗北し、金軍の援助を乞うたので、察南に進出してゐた金の太祖は、軍をひきゐて居庸關から燕京へのりこみ、やす〳〵とこれを占領し、遼に仕へた燕雲の漢人官吏の投降をゆるした。

燕京は金軍の兵力でおとしたといふので、交渉の調子がすつかりかはつて、燕京および、薊、景、檀、順、涿、易の六州を宋にあたへるかはりに、宋から歳幣や割與地の代稅錢、慰勞米などを提供することゝなり、燕京以下六州は宋の有に歸し、金軍は察南方面にひきあげて遼帝の追伐にしたがふことになつた。ときに、宋の宣和四年、金の天輔七年(一一二三)である。六州のうち、景州は晉が契丹にあたへた十六州のうちにはなく、そののち契丹が增置した州で、州治は今の遵化縣がそれである。

燕雲は中國の地、その民は中國の民、夷狄の手よりすくはざるべけんやといつてゐた宋は、燕京以下六州の地においていかなる統治をしたか。このとき、さきに宋に歸順して宋軍に重きをなしてゐる常勝軍といふ一軍があつた。その兵は遼東出身のものが多かつたので、金側へひきわたさねばならぬ約束になつてゐたが宋では、常勝軍を失ふことによつて兵力の不振をきたすことを恐れ、燕京以下の諸州の富裕戸をひきわたすことにして常勝軍を手ばなさなかつた。

空城になつた燕京は、常勝軍が占據した。燕京の士民は家をうばはれ土地を失つた。これが宋の政治の實情である。

○

大同に駐屯して、今日の蒙疆一帶ににらみをきかしてゐたのは、金の宗室の猛將宗翰であつたが、宗翰らは西夏に使をつかはして和好をむすび、遼帝に援助をあたへないことを約束させてしまつた。西夏にたよらうといふ希望を失つた遼帝は、金の天會三年(一一二五)宗翰の不在に乘じて厚和方面から晉北方面に侵入し大同奪回を試みて失敗し、朔州管內で金軍にとらへられて遼はつひに滅亡した。

その間において、察南方面では蔚州、晉北では朔州や武州などが、地方官の歸順によつて一時宋に歸したことはあつたが、また金軍に奪ひかへされた。武州は晉が割いた十六州の武州とはちがつて、その治所は今

の山西省五寨縣東北で、遼が增置したものである。

宋は歲幣を出さず、その他にも背約の行爲が多かつたので、つひに意氣軒昂たる金の將軍たちの憤慨をかひ、金軍は河北、晉北兩方面から宋を伐つことになり燕京を占領し、長驅して宋の都汴京をついた。そして天會五年(一一二七)には、宋の上皇徽宗、皇帝の欽宗以下の宗族をねこそぎ北滿の地へ拉致し、宋の社稷は中絕し、燕雲の諸州はおろか、北支の天地はあげて金の占領するところとなつたのは、それより間もないことであつた。

かくて、燕雲諸州は金の領土になつた。晉北、察南方面は、西方から東進の機會をうかゞふ西夏や、建國後宋と抗爭のために經略の餘裕のなかつた內蒙古一帶の遊牧民にそなへるべき地帶として一層重要性をました。その上、前朝の遺民である契丹人が、今日の蒙疆一帶に多く居住してゐたために、難治の地と稱せられるに至つたのである。その中心西京大同は、また、對宋交涉を胸三寸で決した宗翰の駐屯地であつたために對宋政策の策源地の如き觀をる呈した。宋使はことごとく大同へ來るので、南方文化に接する機會多く、燕京とともに、往年の盛況をもちつゞけたのであつた。

また燕雲の漢人は、遼の治下に在つた漢人を南人と呼ぶのと區別して燕人といはれ、初期の參畫者として金國の發展に寄與するところが甚だ大きい。

參考書目

松井　等　「宋對契丹の戰略地理」(滿鮮地理歷史研究報告四、大正七年)

外山軍治　「燕京に於ける遼宋金三國の角逐 ―特に郭藥師の常勝軍を中心として―」(滿洲學報五、昭和十二年)

朴時亨　「契丹の燕雲十六州領有とその史的意義」(京城帝大史學會誌一三、昭和十三年)

田村實造　「遼の太宗北支進出の一考察」(蒙古學三、昭和十三年)

陳樂素　「宋徽宗謀復燕雲之失敗」(輔仁學誌四ノ一、民國二十二年)

王育伊　「石晉割賂契丹地與宋志燕雲兩路範圍不同辨」(禹貢三ノ九、民國二十四年)